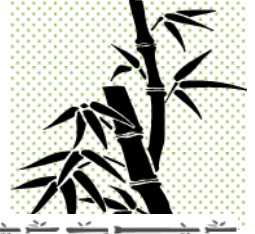


若竹



第67号

2015/9/30発行

お待たせしました、今年度若竹第1号です！遅くなって申し訳ございません。でも、その分内容盛りだくさんでお送りします！

さて、今回のテーマは『校外学習』です。『臨海学校』『キャンプ』『修学旅行』、いや～楽しかったですね…。中3になった僕からすればいい思い出です。中2、中1の皆さんはお楽しみに！

今年度からコラム欄を作りました。少しためになるような話を用意しているのでぜひ読んでください！

次は新任の先生紹介です。あの国語の先生なのできっと面白いはず……

言葉の面白さ 中学3年5組副担任 市川友紀子



今年赴任された市川先生。生まれも育ちも姫路で、大学は広島为学校だそうです。たまに出る広島弁などの方言がチャームポイント。1年目にして修学旅行に行くことのできたとても幸運の持ち主でもあります。(怪我で行けなかった磯村先生はまだ修学旅行に行けていません。可哀想に…)

みなさん初めまして。今年白陵にやってきました、国語科の市川友紀子です。学年は中学3年に所属しています。

わたしが国語の教員になろうと思ったきっかけの一つが、「言葉」というものの魅力を学生の頃に味わったことです。その一つが、和歌でした。みなさんは和歌を知っていますか？百人一首でもおなじみの、五・七・五・七・七で詠まれる短歌形式のものですよ。これ、たった31文字の中で自分の心情や景色を表現するんですよ！

その例として、『新古今和歌集』の有名な和歌の一つを紹介します。「橘のにほふあたりのうたた寝は夢も昔の袖の香ぞする(新古今集・皇太后宮大夫俊成女)」。歌の意味は、「橘の花の香りがにおってくるあたりでのうたた寝は、そこで見る夢の中でも昔親しかった人の袖の香がすることよ。」。

当時、橘の花は昔を回想させるものとされていました。また、当時の人々は、男性女性問わず着物に香りをたっぷり染みこませていました。つまり袖の香りは、昔の恋人、その人を思う気持ちを思い出させるものなのです。たった31文字ですが、この歌からは、橘の花の香る庭とそこで眠る人物、その人物が見る夢の中でも薫る橘の香りと、昔の恋人との思い出とその人への思いなど、場面と心情、そして嗅覚といった五感までもが広がっていきます。

言葉ひとつひとつを連ねただけなのに、こんなにも様々なものを表現する和歌、それを形づくる言葉。言葉の力はここでは伝えきれないほどです。もっと広くて奥深くて、難しい、そして時にはとても怖いものです。そんな言葉と切り離すことのできない教科が国語です。

まだまだ未熟なわたしですが、一生懸命、「言葉」と向き合いながらやっていきたいと思っています。よろしくお願いします。

中一臨海学校

1日目、2日目

カッター訓練について 1年2組 藤本 暖

私がカッター訓練で特に印象に残っているのがレースです。レースとは、江ノ島から帰り道の内の最後の1キロメートルで速さを競います。私は島からスタート地点までの6キロメートルをこいで疲れてしまいました。しかし、周りの人が「頑張ろうな。」と声をかけてくれました。この言葉のおかげで私は残りの1キロメートルをこぎきれたのだと思います。

今回私は、友愛の大切さをこのカッター訓練から学びました。また、カッターの動きをそろえなければスピードが出ないということからは協調性の大切さを学びました。この二つの学んだことをこれからの学校生活に取り入れていきたいです。



いっちにっ！
いっちにっ！



おいしい～！



3日目

ユダヤ人の息づかい 1年4組 武田 千輝

今回、臨界学習で僕らはホトコースト記念館を訪れましたこの記念館は、館長の大塚さんが旅先でアンネ＝フランクのお父さんのオットーフランク氏との奇跡的な出会いから始まったそうです。館内には様々な記念品がありました。一つは、入り口にある、アンネの隠れ家の前に生えていたマロニエの木の二世、もう一つは復元されたアンネの日記帳や部屋、さらには、ユダヤ人が身に着けていた実物の服や靴など、どれも戦時中のユダヤ人の苦しみや嘆き、そしてその中でも必死に生きようとしたアンネたちの思いが伝わってきて、魂が宿っているようでした。この思いを受けて、また、戦後七十年という節目の年に改めて平和を見つめて、世界中が明るくなるよう自分にできることから働きかけていこうと思いました。



いいい!

フムフム…
なるほどなあ

中ニキャンプ

1日目オリエンテーリング

2年5組25番 長谷川 慧人

僕たちが鉢伏高原に行って初めにあった活動は、オリエンテーリングでした。オリエンテーリングでは、チームでチェックポイントを回り、ノルマをクリアして、アルファベットを教えてもらいます。

僕たちのチームは初め、上位三チームに入って景品をもらうことしか考えていませんでした。だから、体力のない人も待たずに走りました。初めから僕たちはチームワークがありませんでした。

二つ目のチェックポイントで僕は友達とスケッチを描いていました。後で追いつけると思って、

「先行っというて。後で追いつくから。」というてチームからはぐれました。しかし、結局それがチームのみんなに迷惑をかけてしまうことになりました。僕たちは地図を持っていなかったし、次の行先も聞いていなかったの、どこに行けばいいのかわからなくなったのです。あいにく次のチェックポイントは全員がそろっていないとノルマを出してもらえないところでした。だから、チームのみんなをすごく待たせてしまいました。勝手な行動をしてはいけなと痛感しました。結局、僕たちのチームは30チーム中13位という微妙な結果でした。これは、チームワークがなかったり、僕がチームを待たせたりしたせいだと思います。それにポイントの巡り方が下手できつい坂道を何度も往復しました。そこで体力も時間もロスしてしまいました。しかし体力の残っている人が疲れている人の荷物を持ったりして、全員でゴールできて良かったです。

思い出に残る飯盒炊爨

二年四組十四番 熊 優奈

今回のキャンプで私達は飯盒炊爨を体験しました。私は小学五年生の自然学校でも体験しました。しかし、その時私は完成した料理の入った皿をひっくり返してしまったので、飯盒炊爨には苦手意識がありました。今回の飯盒炊爨もはっきり言って不安でした。

そして当日、私はじゃがいもを切ったり、水を入れたりしていました。忙しいうえに暑くて、汗だくでした。カレーの準備は思いの外早く終わり、すぐに火にかけました。しかし、かまどの火がなかなか広がらず、苦戦していました。カレーの準備は野菜を切るなどと家で作る時とあまり変わらずスムーズに進んだのですが、かまどは慣れない作業ばかりで、なかなかうまくいかなかった様でした。また、雨も降りだしてじめじめしてきて、余計に不安な気分でした。マッチ棒を何本も何本も使ってようやく、少しずつ火が広がりはじめた時は、見ていただだけでも心から嬉しかったです。味見をするために、にんじんを鍋から取るのには苦労しました。かまどに近づくと煙で目が痛くて涙が止まりません。さらに鍋のふたを開けると灰が中に入ってしまう。熱いのや痛いのをこらえて、味見をしました。家の鍋なら数秒ですむ作業なのに、大変でした。その間にも洗い物や片付けを班の人がしてくれていたの、すぐにカレーを入れることができ、無事にカレーライスが完成しました。私達の班のカレーはクラスでは一番おいしいと評価して頂きましたが、学年では五位でした。少しがっかりでしたが、班員でしっかり役割を分担したので、作業の効率の良さはどの班にも負けていなかったと思います。いつも

と違い不便な環境の中でも、みんなで協力し作ったカレーは特別においしかったです。便利な日常生活とはまた違った良さがありました。今回の飯盒炊爨はいい思い出になりました。



どうしよう



おれたちなら
いけるぜ！

最高！

2日目 スタンツ

浜橋丈

まず最初にスタンツをやることになって、クラスで内容を決める時はグダグダで、正直本番でも全然形にならないのではないかと不安でした。練習もあまり積極的にできてなくてまとまりのない出来でした。

でもスタンツ発表の前日、キャンペー一日目の練習ではそれぞれが恥じらいを感じさせないくらいまでよくなっていて、修復すべきところはお互いに言って改善に努めたりして、J2-2の団結力を感じられてなんだか嬉しい気持ちになりました。

また、私が所属している吹奏楽部としても演奏をしました。コンクールの時期と重なり、ちゃんと合わせて練習できたのはキャンプ前の3日間くらいでした。はじめは本当に曲になっていなくて、スタンツに出ること自体どうしようか悩みました。でも先輩方に協力していただきながら、なんとか曲として聞けるようになり、少しずつ出来はじめました。

本番は色々なハプニングや緊張から、どうしても練習のようにはいかなかったのですが、それでも吹奏楽部メンバーで演奏できて満足でした。また、皆が良かったよと言ってくれたので嬉しかったです。

他のクラスや有志のスタンツもおもしろく、まとまっていてすごく練習してきた様子が目に浮かびました。衣装や小道具などすごく手の込んでいたグループもあり、スタンツへの熱意も感じられました。

今回のキャンプでのスタンツでクラスの結束力の向上を感じられ、また、普段おとなしいイメージを持っていた子が全力でスタンツに取り組んでいる姿が印象的で、同級生の普段とは違う新たな一面を知ることができました。この経験を忘れずに、これからの集団行動などに役立てたいです。



ワッハッハ！

3日目

但馬のまほろば

西田悠人

キャンプ3日目僕たちは竹細工をした後、但馬のまほろばへ行きました。竹細工は割り箸を作ったのですが、思った以上に竹が固かったため根気強くナイフで削らなくてはなりませんでした。また、力が入りすぎると竹が削れすぎて形が変になってしまうので、そうならない為にも集中して取り組む必要がありました。2つの竹がどちらも同じ形になるように作らなければならなかったのが難しかったです。とても大変な作業でしたが、その分できた時の達成感も大きかったです。途中で諦めずに最後までやり通せてよかったと思います。

但馬のまほろばでは馬具や埴輪など昔に作られたものを見ました。どれもかなり昔に作られたものなのに綺麗な状態で残っていて驚きました。馬具にしろ埴輪にしろ細かいところまで丁寧に作られていて昔の人たちはすごいと思いました。昔のもの以外にもパーツを組み立てて古墳を作るパズル的なものもありました。僕は正直これくらいできるだろうと思い、軽い気持ちで挑戦してみました。しかし、このパズルはとても難しく結局出発するまでに完成することはできませんでした。やっぱり普段から何かを考える癖をつけたり毎日勉強をしたりしないと急に考えようと思っても考えられないものだなと感じました。

竹細工と但馬のまほろばで学んだどんなことでも最後まで本気でやり抜くことの大切さと毎日勉学に励むことの重要性を忘れず、これからの生活に活かしていければいいなと思います。



中三 修学旅行

『中尊寺金色堂』 五組七番 上原 萌瑚

金色堂は私がこの修学旅行の中で一番行きたかった所で、自分が事前学習で調べていたということもあり、とても楽しかったです。一番うれしかったのは朱印帳を買えたことです。金色堂で朱印帳を買うと、普通の御朱印ではなく見開きで御朱印を書いてくれるのでとてもカッコいいです。覆堂に入るとその中の光まで金色ですごくびっくりしました。建物全体が金箔でおおわれていても、嫌味な感じが全然なくてすごいなと思いました。螺鈿もたくさんあり、きらきらしていました。一つ一つ手作りであんな細かい模様を描いていて職人魂を感じました。また、柱の一本一本に菩薩が描かれているらしくて、こんな建物に一回入ってみたいなと思いました。金色堂を建立するのに、わざわざ南の方の海から夜光貝を採ってきて紫檀とか他にも様々な宝物をふんだんに使っていて、藤原清衡さんは本当に浄土を表現したかったのか、それとも自分の素晴らしさを見せびらかしたかったのか分からないなと思いました。でも本当にきれいかったです。こんなきれいなものを自分のものにできた清衡さんは幸せだっただろうなと思いました。二四年以降ずっと金色堂を守ってきた人々はすごいと思います。中尊寺にはそれだけ「後世に伝えたい」と思わせる力があるのだろうなと思いました。他にもたくさん国宝や重要文化財があって、奥州藤原氏はとても力のある奥州の覇者だったんだなとおもいました。もっと金色堂を見たかったのですが、あまり時間がなくて残念でした。また行きたいです。



『奥入瀬渓流に行って』 五組一八番 後藤 弘太郎

東北に来てから2日目。僕たちはバスに何時間も揺られながら奥入瀬渓流まで来ました。事前に先生から「素晴らしいところだ。」と聞いていた通り、周りには木が生い茂り、葉と葉の間から日が差し込んでいてとても神秘的な場所でした。「銚子の滝」や「白糸の滝」といったすごく迫力のある滝もあったけど、滝とは思えないほど小さな滝もたくさんありました。足場は整備されていたものの、ありのままの自然が残されていて、自然というスケールの大きさだけでなく、偉大さを目の当たりにしました。また、この自然が人々の手によって守られて今も残っているんだということを感じました。さすがに天然記念物に登録されているだけあって観光客の方もたくさんいらっしゃいました。僕たちは写真を撮ったり、川沿いを友達と一緒に歩きながら奥入瀬渓流の景色を満喫しました。バスに乗りながらの移動でしたが、途中に「阿修羅の流れ」というひどく荒れている激しい流れを見てすごいと思いました。この渓流は特に川の流れが自然できれいだなと思いました。途中で石ヶ戸の瀬という木が大きな石を持ち上げているすごい場所がありました。どこからそんな力が生まれるんだろうか…。僕は自然の力に圧倒されました。僕たちは14キロある中で

少ししか見ることはできなかったけど、自然の壮大さを感じることができました。それだけでなく、この素晴らしい自然を残していくことの大切さを学ぶことができました。僕の家の中には山があります。何度も上ったことがあったけど、今までは無関心でした。でも、奥入瀬渓流に行ってからはずべてがとてもすごいものに思えてきました。あの渓流に行っているいろいろなことを感じたけれど、奥入瀬渓流は僕に「自然はすごい…」と改めて感じさせてくれた場所でした。



マイナスイ
オン!!
涼しい~



『函館の夜景』 四組九番 齋藤 遼太郎

私が見たのは、函館の夜景です。これを見ている方には、「たかだか夜景ひとつだろ?」という方もいるかもしれません。私もその一人でした。けれども、いざ見てみると、予想とは全く違う姿を見せてくれます。夜景を見るため、私は展望台へロープウェイで上りました。ロープウェイのゴンドラに貼ってあるガラスは、息を吐くだけで簡単に曇ります。ゴンドラを降りて、展望台を目指します。その時からすでに、風が吹いていました。寒い、早く帰りたい。最初はそんな風に思っていました。ですが、夜景を見た瞬間、意識は変わりました。

あ、綺麗

街に何気なく置かれている街灯は、近くは鮮明に、遠くは揺らめくように、光を醸し出し、普段は絶対に見られない、北海道の形を目の前に叩き出してきました。寒いから帰りたいなんて気持ちはすでになく、もっと見たいと、身を乗り出して、見ていました。よく見ると、さらにその姿はあでやかになりました。普段は気にも留めないような、車や電車のライト、ビルに隠れた街灯から漏れ出すわずかな光、いつもは邪魔でしかない、ネオンライトの看板。それらすべてがこの夜景を作り出しているのだと思うと、自然と心が震えました。展望台から下へ降りる際のロープウェイでも、函館の夜景は別の姿に生まれ変わります。少々ガラスが曇るのが残念でしたが、今まで平面的に感じていた夜景が、どんどん普段の姿に近づいていく瞬間、もしかしたら、3D映像に似ているのかもしれません。函館の夜景、特に歴史ある街並みでも、世界遺産でもありません。でも、ここまできれいなものだったのです。実は、この夜景を見るまで私は、その存在すら知りませんでした。でも、今ではもう一度見たい場所として、心に深く刻まれています。



『班別自由行動』三組三十七番 松村 理司

修学旅行最終日を飾るのは、函館の街の。出発地である旧函館区公会堂までのバスの移動中、私は感動しました。想像以上に美しい歴史ある町だったのです。坂の上から見渡せる港の眺望も最高でした。私達の班はまず海鮮市場に向かいました。「函館に来てくだサイダー」はなぜか印象に残っています。ここで私は有名どころのお菓子と大好きないかめしを買いました。あ、コーヒーキャラメルもね。次に函館朝市に行きました。美味しそうな物がズラリとならんでおり、財布の金が全部飛んで行ってしまわないか心配でした。班員の一人が、いかーる星人のグッズが売っているショップに行ってみたいということで行ってみましたが、結論を言うてしまうでしょうもなかったです。あとは残りの店をさあーと見ていき、そしてひとりが海鮮丼を食べることになりました。その待ち時間に、買っておいだキャラメルを一つ口に入れてみました。それから次々とキャラメルは口に運ばれていき…ああ美味しかったと思った時には、半分しか残っていませんでした。ちなみに、海鮮丼は美味しかったそうです。そのあと、私は素晴らしいものを見つけました。それは二枚で三百円の焼いてくれるホタテでした。せっかく来たんだからと思い友達に声をかけ、一枚ずつ食べることにしました。六七分かかると言われ十分待ち、やっと焼きあがったホタテ。なにもかけずにそのままいただきました。それはそれはとても美味しかったです。時間もせまってきていて、最後にともえ大橋の上から港の景色を眺めながら集合場所である赤れんが倉庫群に向かいました。途中でイカ漁の船も見つけました。バスのとまっている所に着くと、先生方がおられました。少し早く帰って来てしまったようでした。二時間程度の時間でしたが、様々な事があり、本当に楽しかったなと思います。



中学部生徒委員長、副委員長あいさつ

初めまして！今年の生徒委員長の中島といいます。分かりやすく言うと文化祭の中三の劇で女装していた人です。あの緑のドレスの。ただ、あの一件に関して言わせてもらおうと、僕は決してそういう趣味ではございません。誤解しないでくださいね。

ちなみに僕は実は初めて生徒委員会に入り、そのまま委員長になったのです。なので、委員長でありながらまったく活動内容を知りません。なんで委員長になったんだってツッコミはあえてしないでください。簡潔にいうなら“成り行き”というやつです。

こんなやつが生徒委員長で頼りないでしょう。しかし副委員長をはじめとする今年度のメンバーは優秀です。なので大丈夫、ノープロBLEMです。

長くなりましたがあと残り半年宜しくお願いします！

追記：前言撤回、副委員長の中川君、しょうもない悪戯と愚痴ばっか言ってないで仕事してください

どーもー中学部生徒委員会副委員長の中川翔太です。運動会で行進していた人は分からないでしょうが、生徒委員長の中島君にこき使われた上に頭右のタイミングをずらされた悲しい副委員長です。中3で去年から中学部生徒委員会をしているのは僕を含めてたった3人しかいませんが、今年から入ったみんながとても優秀で心配事が一つもないです。いや〜楽、ほんとに楽です。これから1年間とか言ってもあと半年ぐらいしかないですがよろしくお願いします。

もう一人の副委員長吉見さんの分は、今回は掲載できませんでした。
次号、枠を設けて掲載したいと思います。



中学部生徒委員会中3生徒とプランターの活動を手伝ってくれた中3-2 真鍋君

委員長　：　　中島　大輔	
副委員長　：　　中川　翔太，吉見　香己路	
広報部 部長　　：中村　安希　　　　　活動内容：中学部広報誌『若竹』発行 副部長　：高橋　光 深浦　広志 中二　　：浜橋　丈 堺　優弥 深川　史乃 松島　由奈	
企画部 部長　　：江口優人　　　　　活動内容：常寿園慰問 副部長　：坂口　怜生　　　　　岡白交流会企画 伊藤　ゆり 中二　　：白井　裕衣 小畑　瑛資 楠本　学永 鎌田　紗英	
奉仕部 部長　　：岸　慶吾　　　　　活動内容：豆崎(通学路)清掃 副部長　：小濱　千明　　　　　校門の花手入れ 栗秋　史優 中二　　：明珍　奏 大島　弥子 藤本　昇太 吉尾　周真 為則　小百合	

今年度中学部生徒委員会のメンバーです

さて、表紙でお伝えしたように、今年度初登場のコラムのコーナーです！
一回目のテーマは……じゃん！修学旅行！！

～修学旅行～

ということで、1回目のコラム。テーマは上に書いているように、『修学旅行』です！
修学旅行、英語では『School Trip』。元となったのは18世紀のイギリスにあったといわれる『Grand Tour』といわれています。当時、上流階級の若者は、教育を数人の家庭教師から受け、その学業の仕上げとして文化の先進国であるフランスやイタリアなどに遊学していました。イギリス経験論の哲学者で医者でもあったジョン・ロックもその「教育に関する考察」の中で旅行を学業の仕上げとして勧めています。この旅行は数か月から半年、あるいは1年以上に及ぶもので、そのままそこに住みつくこともありました。…今回のネタは僕が修学旅行の朝の挨拶で久保教務部長のお話で知ったことです。そうです、つまるところパクリですとも、ええ。ただ、ここからはちゃんと自分で調べたことを書きますよっと。みなさん！日本で初めて修学旅行を行ったのは、いつ、どこのことだと思いますか？

答えは……なんと！1882年（明治15年）に栃木県第一中学校（現・栃木県立宇都宮高等学校）の生徒たちが教員に引率され、東京・上野で開かれた「第二回勸業博覧会」を見学したこと、これこそが日本での「学生・生徒の集団旅行」のはじまりといわれています。また、1886年（明治19年）には東京高等師範学校（東京教育大学を経た、現在の筑波大学）が「長途遠足」の名で11日間のものを実施したという記録が残っています。つまり、修学旅行は文明開化の一環として明治時代に取り込まれた、歴史の深いものなのです！

白陵生ならば、修学旅行は中学、高校と二回経験することになります。みなさんも昔の学生のように期間は短いながらもその土地でしっかりと学んでください。

今回のコラムはここまで！次回もお楽しみに！

さ～て、来月の若竹は？

テーマは、“白陵祭”！今年も異様な盛り上がりを迎えた文化祭、そして汗水たらして闘った運動会。楽しかったですねえ～。ちなみに僕は女装することになったり、百メートル走で靴が脱げたり、といろいろ思い出したくもない思い出も作りつつも、まあ充実した“白陵祭”を過ごせました。皆さんはどうでしたか？

表紙の新任の先生紹介は“細川先生”。さわやかな笑顔が素敵な先生です！さてさてどのようなお話になるのやら…。来月号を見逃すな！

最後になりましたが、あと半年、中学部生徒委員会をよろしくお願いします！

(written by 中島、深浦)